

たけむすあいま
武産合気

目次

推薦のことば	植芝吉祥丸	4
詩 神の化身―植芝盛平翁を稱う	五井 昌久	6
合気道と宗教	五井 昌久	9
武産合気	植芝 盛平	27
合気道とは		28
道歌		40
一、合気道は宇宙万世一系の理道なり		43
二、合気道は天授の真理にして武産合気の営みである		53
三、合気道は和合の大道であり宇宙経綸の道へのご奉公である		68
四、合気道は言霊の妙用 宇宙みそぎの大道である		85
自己完成の道		97
祈りについて		104
武のはじめ		110
武産合気の根源		115
私の合気修業方法		125
合気の錬磨方法		133

真の武	139
武気について	147
二度目の岩戸開き	155
神のたてたる道	159
霊のみそぎ法	167
祭政一致の本義	172
神の生宮	176
天の呼吸 地の呼吸	181
大先生随聞記	185
一、神楽舞	185
二、宇宙と一つ	190
三、一剣にすべて吸収	195
四、植芝先生の横顔	197
植芝盛平翁の昇天	202
植芝盛平先生の思い出	206
あとがき	217
高橋 英雄	
五井 昌久	
高橋 英雄	

推薦のことば

植芝吉祥丸

(前・合気道主)

この度“武産合気”が装訂を改めて立派に出版されるとのこと、私ども日々合気道を行じている者にとって誠に喜ばしいことです。

“武産合気”は、合気道開祖植芝盛平翁生前の道話を、高橋英雄さんが誠に忠実に、しかも難解な部分をよく演述され集大成されたものです。

盛平翁が指示された道義については、人間の心と体の相関から、最近特に心の問題が世界的に大きな社会問題として取り挙げられている時、各面の注目を浴び合気道の発展につながっていることは誰しも知る処です。

“武産合気”は幾多合気道に関する書籍の中でも、盛平翁の心を率直に表現し、根本の

真義を強く訴えている点で常時私どもの座右に置かるべきものです。

しかも、「私の心を知っている人は五井先生をおいて外に無い」と言われた盛平翁と五井先生との交遊、しかもそのご門下であられる高橋さんが心血をそそいで、その口述を筆記されまとめられた「武産合気」であって見れば、この出版は誠に時宜を得たものであり、貴重な文献として広く各面の人々による一読をも期待し度い書物と言えます。

ご出版、心からお祝い致します。

昭和六十一年十月

神の化身

——植芝盛平翁を稱う——

五井昌久

其の人は確かに神の化身だ

其の人は肉体そのまま宇宙になりきり

自己に対する相手をもたぬ

宇宙と一体の自分に敵はない

其の人は当然のようにそう言い放つ

五尺の小身

八十路やそじに近い肉体

だがその人は宇宙一杯にひろがっている自分をはっきり知っている
如何なる大兵の敵も

どのような多数の相手も

そのまま空くうになりきっている

其の人を倒す事は出来ない

空くうはそのまま天御中主あめのみなかぬし

天御中主あめのみなかぬしに融けきったところから

その人は守護神そのままの力を出だす

この人の力はすでにすべての武を超えた

大愛の大気のはたらき

鋭い眼光と慈悲のまなざし

その二つのはたらきが一つに調和し

その人の人格となって人々の胸を打つ

その人は正に神の化身

大愛絶対者の御使人みつかいびと

私はその人の偉大さを心に沁みて知っている

合気道と宗教

五井昌久

神はからいによる植芝翁との対面

先日合気道の創始者、植芝盛平翁が、東京神田の講演会場に、私を尋ねておいでになった。植芝先生には、私も以前から一度お目に掛りたいと思っていたのですが、先日光和堂から出ている合気道と云う本を見て、この方には是非お会いしたいと、改めて思ったのです。

ところがこの想いが、数日をいわずして直ちに実現して、神田での対談になったのであります。この対談までの経過は偶然のようでいて、実に微妙なる神はからいによって進められていったのです。

それは、私が合気道の本を読んだ明くる日、出版の方の人に、私の著書を植芝盛平先生に御送りして置いて下さい、植芝先生は神の化身のような立派な人だから、と申して置いたのです。そうしますと、出版の方で早速送本するつもりで宛名を書いているところへ、林さんと云う婦人が見えられて、ふとその宛名を見て、＼あら植芝先生なら、私の主人が大変御懇意にしております＼と云われたので、そこにいた会の理事の人が、＼うちの先生は植芝先生に一度お目にかかりたい、と申されているのですよ＼と軽い気持で云ったのだ

そうです。

すると林夫人は、〃そうですか、五井先生と植芝先生がお会い出来たら、私共も大変嬉しいし、きっと双方に善い事になります。私帰って主人から植芝先生にそう申し伝えましょう〃と勇んで帰ってゆかれたのですが、その翌日道場に電話を掛けてよこされ、〃主人が早速植芝先生に五井先生の御心をお伝え致したところ、一ヶ月も前から、自分の会いたい人から迎えがくる筈だが、いったい誰れが使いしてくるのか、と思っていたところだったが、その使いはあなたでしたか、すぐにでも市川へ伺いましょう、と申されている〃と云う事でした。そこで私は、わざわざ市川へお出向き下さるのも大変だから、神田の会の日にお出掛け下さるようにな、とお答えして置いたのであります。そして対談と云う事になったのです。

この経過は偶然にしては、あまりにも、すべて調子がよくゆきすぎております。たまたま見える人が、その封筒の宛名を書いているときに行き合わせる等と云うのは、偶然としてはあまりにも偶然過ぎますし、私の存在を知らされた植芝先生が、一ヶ月も前から私の対面が判っていた、と云うのも、偶然とは云いがたい事であります。

こうした神はかりによって、植芝先生と私が対面したのでありますが、〃やあ、いらっ

しゃいませ”、”やあ、今日は”と云わぬ先きから、二つの心は一つに結ばれて、私は植芝先生と云う人格、否、神格がすっかり判ってしまったし、植芝先生も、私のすべてがお判りになったようでありました。

あまりお話はなさらないと云う先生が、心から嬉し相に打ちとけて、私の講演が始まる六時までの二時間を、その時間を超えてもまだお帰りになる気持にはならなかったろうと思われる程に親しまれて、”またちよいちよい伺います”と云われて帰ってゆかれたのであります。

合気とは我即宇宙たらしめる道である

この日の植芝先生のお話や、合気道についての本から得た私の感じでは、合気道と云う武道の一種と見られる道は、空を行ずる事が根幹であり、そこから生まれる自由無礙むげの動きであり、大調和、愛気の動きである、と思つたのです。空を行ずると云う言葉を云いかければ、自我の想念を無くすると云う事であります。

植芝盛平翁は、この真理を、身をもって悟り、身をもって実際に行じておられるのですから、私が偉大な人と思ひ、お会いしたい、と云う氣になつたのです。

植芝翁の言葉をそのままお伝えすると、

——合気とは、敵と闘い、敵を破る術ではない。世界を和合させ、人類を一家たらしめる道である。合気道の極意は、己を宇宙の動きと調和させ、己を宇宙そのものと一致させることにある。合気道の極意を会得した者は、宇宙がその腹中にあり、「我は即ち宇宙」なのである。私はこのことを、武を通じて悟った。

いかなる速技で、敵がおそいかかっても、私は敗れない。それは、私の技が、敵の技より速いからではない。これは、速い、おそいの問題ではない。はじめから勝負がついているのだ。

敵が、「宇宙そのものである私」とあらそおうとすることは、宇宙との調和を破ろうとしているのだ。すなわち、私と争おうという気持をおこした瞬間に、敵はすでに敗れているのだ。そこには、速いとか、おそいとかいう、時の長さが全然存在しないのだ。

合気道は、無抵抗主義である。無抵抗なるが故に、はじめから勝っているのだ。邪気ある人間、争う心のある人間は、はじめから負けているのである。

ではいかにしたら、己の邪気をはらい、心を清くして、宇宙森羅万象の活動と調和することができるか？

それには、まず神の心を己の心とすることだ。それは上下四方、古往今来、宇宙のすみずみまでにおよぶ、偉大なる「愛」である。「愛は争わない。」「愛には敵がない。」「何ものかを敵とし、何ものかと争う心は、すでに神の心ではないのだ。これと一致しない人間は、宇宙と調和できない。宇宙と調和できない人間の武は、破壊の武であって、真の武ひた産ひす（註 神道の真理の言葉）ではない。

だから、武技を争って、勝ったり負けたりするのは真の武ではない。真の武はいかなる場合にも絶対不敗である。即ち絶対不敗とは絶対に何ものとも争わぬことである。勝つとは己の心の中の「争う心」にうちかつことである。あたえられた自己の使命をなしとげることである。しかし、いかにその理論をむずかしく説いても、それを実行しなければ、その人はただの人間にすぎない。合気道は、これを実行してはじめて偉大な力が加わり、大自然そのものに一致することができるのである。――

と云われるのであります。これが神の言葉でなくて何んでありましょ。この言葉は全く、宗教の道そのものの言葉であります。こうした言葉が理論的な頭や、言葉だけの言葉になって説教されたら、その言葉に生命がないのでありますし、折角の真理の言葉も、人の心を打たずに済んでしまうのですが、植芝翁の場合は、この言葉の通りに実行されてい

るのであり、何者にも敗れた事の無い実績を残しておられるのですから、感動させられるのです。

私はこの言葉を書きながらも、非常な感動で胸が熱くなってくるのです。

神の化身——植芝翁

植芝翁は確に神の化身であります。その神の化身は非常に謙遜であって、肉体身としては、自分の子供に等しい（翁は明治十六年十一月生、私は大正五年十一月生）無名の宗教者のところへ、御自分の方からお出掛け下さって、これからは先生の働き時、私はお手伝いになりますよ。と云われるのですから、益々そのお心が輝やくのです。

こうした心は仲々得難いものであります。いたずらに尊大ぶり、唯我独尊を誤り思つて他を弱小視したり、常に他教団との勢力争いをしたりしている宗教者は、慚愧すべきではありません。

宗教者は、まず愛の心が深くなければなりません。調和精神が深くなければなりません。勢力を争う想いや、建物の立派さ、信徒数の強大さを誇る想いが、少しでもあるようならばその宗教主管者は、本物ではありません。

この世は神の世界であつて、業想念の世界でも、自我欲望の世界でもありません。すべ
て神のみ心の如く成つてゐる世界なのであります。神の大経綸は、着々として行われてい
るのであります。

自己が自我欲望の中に住みながら、神の使徒である、と思おうとするのは、泥田の中に
いて体を洗つてゐるのと等しいのです。自我欲望とは、愛の心を乱し、大調和の心を乱す
一切の想念行為であります。これはいくら声に出ずる言葉でいつても駄目なのです。實際
に心に想い、行為を行じなければ駄目なのであります。

植芝翁と私の対談中、ある靈能の開けた人が、傍にいたのですが、その人の心には、二
人の姿が、すっかり透明に見えたそうですが、それは、翁にも私にも自己の我と云うもの
が全くないから、想念の波をその靈能者に感じさせずに透明に見えるのです。

翁の姿を私が観てみますと、植芝翁と云う肉体人間の姿はなく、神道に記されて在る、
ある有名な神の姿がそのまま口をきいておられるのです。これは翁に自己の我の想念が全
くないと云う事で、神の化身として働いておられる証しょうこ拠こであります。

翁の合気は、一度に何人の相手でも投げ飛ばす事も出来るし、何百貫の重量の物でも、
平気で持ち上げる事が出来ると云う事であります。こうした時には、翁の空になつた肉体

身をこれも神道に記されているある武の神が働かせて為させるのであります。

お目に掛からぬ前から私はそれを知っていましたが、お会いしてみても、その原理を改めではつきり知ったのです。

私も自叙伝「天と地をつなぐ者」で書いていますように、守護神によって指導されながら行った、想念停止の練習、つまり空観の練習によって、空体になる事を得たので、神がそのまま私の体を使い、私の頭を使い、私の口を使い、私の今日迄の学問知識を使い、大調和世界、神国再現の働きをなさしめておられるのであります。

植芝翁の神我一体観の体験

植芝翁が、神との一体観を体験された事を——たしか大正十四年の春だったと思う。私
が一人で庭を散歩していると、突然天地が動揺して、大地から黄金の気がふきあがり、私の
身体をつつむと共に、私自身も黄金体と化したような感じがした。それと同時に、心身
共に軽くなり、小鳥のささやきの意味もわかりこの宇宙を創造された神の心が、はつきり
理解できるようになった。その瞬間私は、「武道の根源は、神の愛（万有愛護の精神）で
ある」と悟り得て、法悦の涙がとめどなく頬を流れた。

その時以来、私は、この地球全体が我が家、日月星辰はことごとく我がものと感じるようになって、眼前の地位や、名誉や財宝は勿論強くなろうという執着も一切なくなった。

武道とは、腕力や凶器をふるって相手の人間を倒したり、兵器などで世界を破壊に導くことではない。真の武道とは、宇宙の気をととのえ、世界の平和をまもり、森羅万象を正しく生産し、まもり育てることである。すなわち、武道の鍛錬とは、森羅万象を、正しく産みまもり、育てる神の愛の力を、わが心身の内で鍛錬することである、と私は悟った。

と申されている。拙著「天と地をつなぐ者」では、私の同じような体験が書いてありますから参考の為此に載せてみます。

私の神我一体観の体験

——自然はなんて、美しいのだろう、私は自然の美しさの中に半ば融けこみながら、世の中から病苦を除き、貧苦を除かなければ、この美しさの中に全心を融けこませるわけにはゆかないのだなあ、と自分の責任でもあるような痛い声を心のどこかできいていた。

私はその声に応えるように、「神様、どうぞ私のいのちを神様のおしごとにおつかい下

さい」と、いつもの祈りを強くくりかえしながら歩いた。そのまま向岸へ渡る舟着場まで来て、土手を下りようとした瞬間「お前のいのちは神が貰った、覚悟はよいか」と電撃のような声がひびき渡った。その声は頭の中の声でも、心の中の声でもなく、全く天からきた、意味をもったひびき、即ち天声であったのだ。それは確かに声であり、言葉である。しかし、後日毎朝毎晩きかされた人声と等しきひびきの靈言ではなかった。私はそのひびきに一瞬の間隙もなく「はい」と心で応えた。

この時を境に私のすべては神のものとなり、個人の五井昌久、個我の五井昌久は消滅し去ったのである。しかし事態が表面に現われたのはかなり日時が経ってからであった。

私はひととき、土手の下りぎわで、じいっと眼を閉じたまま何も想えず立ちすくんでいたが、やがて夢から醒めた人のように眼を開けた。太陽は白光さんと輝いている。小鳥の囀りも耳もとに明るい。私は一時の緊張で堅くなった体を両手で交互にさすりながら、渡舟に向っていった。「私のいのちはもうすでに天のものになってしまったのだ、この私の肉体は天地を貫いて此処にいるのだ」私の心は澄み徹っていて、天声に対する何の疑いも起こさなかった。

と云う体験から、その間幾多の靈的修業をさせられて、現在の私になる直前、即ち、

——私は例の如く就寝前の瞑想に入った。想念停止の練習により、私は直ちに統一する事が出来る。その夜統一したと思うと、吸う息がなくなり、吐く息のみがつづいた。すると眼の前に天迄もつづいているかと思える水晶のように澄みきった太く円い柱が現われ、私は吐く息にのり、その太柱を伝わって上昇しはじめた。——中略——

七つ目の金色に輝やく靈界をぬけ出た時は、全くの光明燦然、あらゆる色を綜合して純化した光明とでも云うような光の中に、金色に輝く椅子に腰掛け、昔の公卿の被っていたと思われる紫色の冠をかぶった私がいた。『あつ』と思う間もなく、私の意識はその中に合体してしまった。

合体した私は静かに立ち上がる。確かに其処は神界である。様々な神々が去来するのが見える。——中略——

天の私（真我）に地の私が合体して停っているこの現実。靈的神我一体觀が遂いに写実的神我一体として私の自意識が今確認しているのである。

想念停止の練習時にはもう少し上に（註・奥に）もう一段上に自己の本体がある、と直感しながら今迄合体出来なかったその本体に、その時正しく合体したのである。吾がうちなる光が、すべての障害を消滅せしめて大なる発光をしたのである。その時以来、私は光そ

のものとしての自己を觀じ、私の内部の光を放射する事によつて、悩める者を救い、病める者を癒しているのである。

天とは人間の奥深い内部であり、神我とは内奥の無我の光そのものである事も、はつきり認識した。——中略

——空觀とは、空そのものが終局ではなかつたのである。空になるとは現象的、この世のすべての想念を一たん消滅し去つて、その「空」となつた瞬間、眞実の世界、眞実の我がこの現象面の世界、現象面の我と合体して、天地一体、神我一体の我が出現してくるのである。眞我の我とは一体何か。神我であり、慈愛であり、大調和であり、自由自在な心である。——という体験を経て、最後に

——瞑想してやや暫くした時、眼の前がにわかにならぬ光明に輝いてきた。私は想念を動かさず、ひたすらその光明をみつめている。すると、前方はるか上方より、仏像そのままの釈尊が純白の蓮華台上に結跏趺坐けつかふざされて降つて来られ、私の方に両手を出された。私も思わず、両手を差し出すと、如意宝珠にょいほうじゆかと思われる金色の珠を私の掌に乗せて下さった。

私は思わず押し頂き、靈体の懐に収めた。その後、現象界で云う、おさかきのような葉

を五枚下さって、そのまま、光輝燦然と消えてゆかれた。私は暫く釈尊を御見送りする氣持で瞑想をつづけていると、今度は、やはり光り輝やく中から、金色の十字架を背負ったイエス・キリストが現われたとみるまに、私の体中に真向うから突入して来て消えた。その時、*「汝はキリストと同体なり」*と云う声が、烈しく耳に残った。私のその朝の瞑想は、その声を耳底に残したまま終ってしまった。私は深い感動と云うより、痛い程の使命觀を胸底深く感じていた。その事が単なる幻想でない事を、私の魂がはっきり知っていた。*「汝は今日より自由自在なり、天命を完うすべし」*と云う内奥の声を、はっきり聴いていたからである。私は直覺的にすべてを知り得る者、靈覺者となっていたのである。

私はその日から表面は全く昔の私、つまり、靈魂問題に夢中にならなかつた以前の私に還元していた。私はすべてを私自身の頭で考え、私自身の言葉で語り、私自身の手足で動き私自身の微笑で人にむき合つた。私の眼はもはや宙をみつめる事もなく、私の表情は柔和に自由に心の動きを表現した。私はもはや神を呼ぶ事をしなかつた。人に押しつけがましく信仰の話をしなくなつた。父母にも兄夫婦にも弟にも、昔の五井昌久が甦つてみえた。柔かな、思いやり深い、氣楽で明るい息子が冗談を云いながら、老父の脚をさすり、老母の肩をもみほぐす毎夜がつづいた。――

と云う事になったのであります。

真実に神我一体観、宇宙との一体観を体験致しますと、自分と相手とか、自分の敵とか云う想念は全く無くなるのであります。

植芝先生は、力による武道から、遂に神我一体の境地を経て、宗教道と全く一つである合気武道を創設されたのであり、私は、はじめから自己の弱少を悟って、すべてを神に任せ、そこから神我一体の境地に至り、神様の器になり切ったのであります。

修業の道は全く異なった形をとりながら、行きついたところは、全く一つの境地であった事が、植芝先生と私を今日の結ばれにもっていったのであります。

境地が一つであれば、行き方が異っても、必ず一つに結ばれるものであるのですが、現在の宗教界は仲々一つに結ばれそうもありません。それは、各主宰者が、真実の空の境地、自由自在の境地になっていないからなのであります。

神が愛である事を固く信じて下さい

私は、自己の肉体の智慧知識や能力が、他の人に秀れている等と思った事はありません。ですから、老人や幼児に対しても、その人々を、下に見下して話をするような事はしてみ

た事ありません。只、教えの言葉、浄めの態度には、厳然としたものがあります。それは肉体の私がするのではなく、神がするのであるからです。

私は神の愛を、私の肉体を通して、優しく判り易く、人間世界に伝えようとしている者であります。神は愛なのです。神は慈愛なのです。だから人間を救おう救おうとなさっていて、決して罰しよう等とは思っていらっしやらないのです。それを誤った宗教者が、神の罰を説いたり、心の欠陥ばかりを責め裁いたりして、宗教を求める善人を、狭い窮屈な、暗い人間にしてしまい、気の強い悪人をして、宗教の門、神の門からしめ出してしまっているのです。

あなたは神に愛されている神の子なのです

白光表紙裏の、私の教義を何度も何度も読みかえしてみてください。神様の愛が、心に沁みってくる筈です。神様は御自分の子である人間に真実の姿を知らせたがっていらっしやるのです。おまえは私の子なのだよ、光り輝くものなのだよ。おまえが今、生活に苦しみに病気に苦しんでいるように見えるけれど、それは決して、おまえの本心が苦しんだり嘆いたりしているのではないのだよ。そうした苦しみや嘆きは、おまえが私の方を振り向か

いで、おまえが勝手にその苦しみの中に入りこんでしまっているのだよ。だからわたしは、釈迦をつかわして、この世のすべては無であり、空くうである、み仏だけの世界なのだと言かせたり、イエスをつかわして、おまえたちすべての罪惡觀念の贖罪者として、おまえたちすべての惡とか、迷いとか云う想念おもいを十字架にかけてみせ、人間には本来罪穢れはないのだよ、と知らせてやったのだけれど、おまえたちには仲々わからない。そこで今度は、守護靈、守護神と云うものを、おまえたちの救いとしてはっきり示したのだよ。そしてその力にしっかりとすがっていさえすれば、いつの間にか、わたしの子である事が、はっきり判って来て、おまえたちが勝手につくった罪惡感や、業想念行為の渦から知らぬ間にぬけ出してしまい、そうしたマイナスの面は消滅してゆき、おまえたちの世界はわたしの姿をそのまま現わした、大調和世界、愛と真と美の世界になるのだよ。何んでもよいから、想いのすべてを守護の神靈を通して、わたしの方に向け通していればよいのだ。それを祈りと云うのだよ。”

と私を通して、みなさんに知らせているのです。自分を罪深い者と思い、駄目な者と思っ
ていてはいけません。自分は神から来た者であることを、一心こめて知らなければなりません。駄目なのは、あなたが肉体身だけを自分だと思っ
ているからで、あなたの本心は

神から来ているのですから、駄目なわけはありません。その真理を信じて、自分を赦し、人を赦し守護の神霊への感謝をつづけ、世界平和の祈りに明けくれるようにしていただいなさい。必ずあなたの夜明けが訪れ、地球世界に平和な日が訪れてくるでしょう。

植芝先生たちや、私たちは、方法こそ違え人類世界の大平和実現の為に、神様から遣わされている天の使者なのです。どうぞみんなで手をつないで世界平和の達成の為に働きつづけようではありませんか。

武たけ産むす合あい気き

植芝盛平

合気道とは

(1)

今日はお尋ねにより、合気道とは何か、ということについて申上げてみましょう。

合気道とは、宇宙の万世一系の理であります。

合気道とは、天授の真理にして、武産たけむすの合気の妙用であります。

合気道とは、天地人てんちじん、和合の道とこうなるのであります。

また合気道とは、万有の処理の道であります。

合気道とは、言霊ことたまの妙用であり、宇宙みそぎの大道であります。

この道を思惟しゐいする人々は、宇宙建国完成の経綸に奉仕しなければならぬことになって
おります。

人としての使命を遂行し、世界大家族大和合の指標たるものでなければいけません。それについては、よく宇宙の真理真相を悟り、大神さまのみ心に同化して、この大きな宇宙の大神さまのお姿お振舞いに神習うて、つるぎの行いとなって、経綸に奉仕しなければいけません。

合気道は、どうしても「天之浮橋に立たして」の天の浮橋に立たなければなりません。これは一番のもとの親様、大元霊、大神に帰一するために必要なであります。

またほかに何がなくとも、浮橋に立たねばならないのです。

大神さまに自己を無にして、自分は鎮魂帰神の行いにかなうように努めることであります。

一番の神業は、大神にして創造主たる神に同化、帰一和合すること、つまりその方法は与えられたつとめを尽すこと、精霊のご神霊にむすんでゆくことである。大宇宙に同化することになるのであります。

そしてこの霊は霊、体は体でとのえていかなければならない。みな霊、体をととのえて、気、流、柔、剛とその世界に進んでゆくのである。

そしてこの氣と流、柔、剛との境を正しくとのえて、そして明かに体得してゆくのを
識心しきしんという。

この宇宙の靈、体に同化し、そして和合の光のこの修行をすることを合氣道と今、名づ
けているのであります。

たとえば、地に汚れたものがあると、虫がきてこれをきれいに処理してゆく。このよう
に、虫類、魚類、鳥類、獸類等すべてに、その処理方法があります。

人間は、汚れ、けがれを浄め祓い、そしてその人その人の天授の使命を完うさせてゆく
のが、合氣道であり、またそのために、あなた方は、五井先生の提唱されている「世界平
和の祈り」を祈っているのです。けれど口先きばかりの祈りではいけない。実際に行じな
ければ、何にもならないのです。

(2)

合氣道とは、真の武であり、愛のみ働きであります。

この世のすべての生物の、守護の道であります。即ち、この合氣道は、すべてを生かす